

■著者紹介 (執筆順。①所属 (専門分野)、②ひと言)

平井 一臣 (ひらい かずおみ) 編者、プロローグ・第3章・第5章

- ①鹿児島大学 (日本政治史、地域政治)
- ②歴史の大きな変化のなかで変容を迫られる大学。にもかかわらず、あるいは、であるからこそ、大学、学問、政治学の使命は何か。日々思い悩む毎日です。

土肥 勲嗣 (どい くんじ) 編者、第1章・エピローグ

- ①久留米大学法学部 (政治学)
- ②身体の内側にあるヘソは私たちが母親とつながっていた証拠です。目には見えにくいですが、私たちは色々な形で他者とつながっています。この本が読者と他者のつながりを考えるきっかけになってくれればうれしいです。

宇野 文重 (うの ふみえ) 第2章

- ①尚絅大学現代文化学部 (家族法史、日本法制史)
- ②勤務先の女子大学の講義でジェンダーやマイノリティーについて取り上げると、みんな真剣なまなざしで聴いてくれることに心強さを感じています。若いみなさんには、社会と自分自身の「多様性」に、可能性と希望を感じてほしいです。

池上 大祐 (いけがみ だいすけ) 第4章

- ①琉球大学国際地域創造学部 (アメリカ現代史、太平洋島嶼現代史)
- ②安全保障について考えることは、単に軍事に詳しくなる、ということ以上に私たちの日常生活の在り方、今後の生存の在り方を考えるための素地になります。一歩ずつ、米軍基地をめぐる様々な難題と向き合っていきましょう。

渡邊 智明 (わたなべ ともあき) 第6章

- ①福岡工業大学社会環境学部 (国際政治学、環境政策)
- ②今日までグローバル化が急速に進んできましたが、トランプ大統領の登場などによって、世界の動向が不透明になっています。こういう時代だからこそ、政治の役割を見つめ直すことが必要になっていると思います。

山田 良介 (やまだ りょうすけ) 第7章

- ①九州国際大学現代ビジネス学部 (政治史・日韓関係)
- ②「つながる」形はいろいろあります。韓国や中国との関係では歴史問題などによる対立が目がいちがちですが、日本とアジアの国々との人の往来は拡大しています。このような「つながり」にも目を向ける必要があります。

花松泰倫 (はなまつ やすのり) 第8章

- ①九州国際大学法学部 (国境学、境界研究)
- ②政治や社会の問題に正解の答えなどありません。私たちの社会そのものがデタラメだからです。そんな複雑多様な世界に生きる一人の人間として、本書を通して自分だけの答えを出す楽しさを掴んでもらえたらと思います。

藤村一郎 (ふじむら いちろう) 第9章

- ①鹿児島大学 (日本政治外交史・思想史)
- ②人間、生きていくためには「生業」(なりわい)と「勤め」(つとめ)が必要です。お金になる仕事(生業)ばかりやっても生きていくのは厳しいです。住居周辺・地域社会の人間関係や公共について、考え行動すること(勤め)なしには難しいのです。政治というのは「勤め」の延長線上にあることをわかっていただきたいなと思います。

篠原新 (しのはら はじめ) 第10章

- ①広島修道大学国際コミュニティ学部 (日本政治・政治過程論)
- ②現在でも、日本では当たり前選挙を行っていない国が多くあります。選挙という視点から世界を眺めると、選挙で投票できることの貴重さや投票に行かないことの「もったいなさ」を感じられるのではないかと思います。

原清一 (はら せいいち) 第11章

- ①志学館大学法学部 (政治学)
- ②自然現象であれ、科学技術の話であれ、テレビドラマのストーリーであれ、一見無関係な事柄と事柄が、実は「つながっている」とわかるのは面白いものです。政治学も、ぜひ「つながり」を意識して学んでください。

遠山隆淑 (とおやま たかよし) 第12章

- ①熊本高等専門学校リベラルアーツ系 (西洋政治思想史・政治学史)
- ②「あたり前 (= 自明)」を疑うことが学問の出発点です。そこから私たちは自力で考えて、自由にもなれます。ぜひ人間の世界を包括的に捉える政治学を学んで、様々な「あたり前」を疑う術を身につけてみてください。